

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第卷七十五第

統制經濟の諸概念……………高田保馬

ベッティの政治算術論……………白杉庄一郎

コンツェルンに關する覚え書……………靜田均

中小工業と問屋の機能……………田杉競

ゴットルに於ける經濟と社會……………杉原四郎

彙報

行發月十年八十和昭

中小工業と問屋の機能

——特に桐生、足利織物業について——

田 杉 競

一 問屋の生産的機能

自由經濟にあつては、商品の種類、數量から生産要素の組合せなどに至るまで、生産に關する殆どすべての要素は生産者の判斷によつて決定せられねばならず、市場が擴大せる今日、大量多様な需要に對應するがためには、十分なる知識と經驗とを以て極めて的確機敏なる處置をとらねば競争場裡において敗退する。生産者の判斷の主たる標準はいふまでもなく價格であり、當該商品のみならず、その代替的商品、補完的商品について、またこれらを生産するために必要な諸生産要素について、現在の價格を知るとともに、各種の事情から更にこれらの將來の價格をも推測することが必要である。勿論、その背後に技術的知識もなくてはならぬ。かくて完全競争理論は「完全なる知識」を前提したのである。¹⁾然し現實の經濟が靜態にあらず、絶えざる變動を続け、又完全なる知識が望み得ない限り、生産の方向と規模とに關する、一層困難なる判斷こそ企業者の機能の最も中心的なものであり、とくに飛躍的劃期的な可能性を發見し、これに對する生産の計畫と遂行とを行ふことが、シムムベータの「新らしき結合」に外ならない。³⁾

1) Hicks, J. R., Value and Capital, p. 130, 123, 193 et seq.

2) Knight, F. H., Risk, Uncertainty and Profit, p. 77.

3) Schumpeter, J., Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung, S. 100, III.

4) 東畑精一、日本農業の課題、123、199頁以下。拙著、下請制工業論、79頁。

然しながらかくの如き生産計畫の判斷は、その遂行とともに、現實の經濟において決して容易なことでない。殊に單なる技術的知識と限られたる經營上の經驗とのみを支柱とする中小工業者、農業者にとつては、市場のすべての狀況が從來通りのものである限りにおいてのみ、まづ誤らざる判斷に達し得るに過ぎない。若干の産業部門に於ては、絶えず價格變動の經驗に鍛へられ、いはば彼等も資本主義的訓練をつむこともあるが、多くの中小工業者にあつては一般にかゝる判斷の能力に乏しいといへよう。こゝに商業者たる問屋その他が生産過程に干渉する餘地がある。

問屋は商品を生産者より買入れ、消費者に近い他の商業者に販賣するといふ基本的機能のほかに、販賣に適當せる時期まで之を貯藏し、同時に之に伴ふ金融活動を営む。然しながら市場の擴大するとともに、進んで市況の豫測をなし、如何なる種類の商品を幾何數量だけ生産すべきやを判斷し、それに基づいて生産者に直接間接の指示を與へる。また屢々之に伴つて必要な原料の供給あるひは資金の前貸をも行ふ。かかる生産の計畫を樹立し、その方向と規模とを決定するところに、いはば問屋の生産的機能がある。中小工業の立場より見るとき、この機能こそ極めて重要なものであり、ゾムバルトの指摘する如く、問屋制工業が勞働生産力の増大を實現したのは全くこれによる。

やや具體的に見れば、かかる問屋機能を営むものには、産地の問屋、買繼商と集散地の問屋との分化が現れ、何れがより多くの機能を果したかは、産業部門により時代により差異がある。いま絹織物業につき桐生、足利を例として、その生産組織を概観すると共に、之に對する問屋の活動を分析する。たゞ茲に取扱ふのは明治以後、支那事變勃發までの時期であり、その間における問屋活動の變遷を中心とする。織物業は一般的には市況變

5) Lipson, E., The History of the Woolen and Worsted Industries, p. 41 et seq.
 6) Sombart, W., Der moderne Kapitalismus, II, 2, S. 724-29.
 7) 兩地と關聯深き伊勢崎をも同時に論すべきであるが、調査の都合上、他の機會に譲る。

動激しく、従つて中小工業者も比較的よく資本主義的訓練を経てゐるが、兩毛機業地はその零細規模のために概して生産者の獨立が遅れた一例といへよう。

二 桐生足利織物業の發端

桐生及び足利は東國の織物産地としてその起源極めて古く、戰亂のため時に廢滅に歸したこともありながら、屢々皇室あるひは幕府へ獻上して、仁田山絹、足利絹の名を残してゐる¹⁾。今日の機業隆盛の端は徳川時代にある如く、その初期に於ては主として農家の副業として行はれて、專業の機屋はなく、坐織機による平絹の域を脱しなかつた²⁾。この頃(寛永六年)養蠶業の一中心たる大間々に絹市開かれるや桐生足利の絹織物は多くここで取引された。徳川中期、即ち享保、文化、文政の頃に至つて漸く機業の發達著しく、製品の種類と數量を増加した。たゞ大間々市の繁盛に引きかへ、既に天正年間桐生新町に開かれた絹市は次第に衰微したので、享保十六年に絹市立替(市目改正)を行ひ、これより生産のみならず、近在の織物の取引も多く桐生に於て行はれることとなつた。足利には絹織物よりも、綿織物、絹綿交織物が多く生産され、最初は桐生絹市を通じて賣られ、附近産額の増加に伴つて漸く桐生に拮抗するに至り、天保三年桐生市場より獨立して足利絹市が開かれた。(尤も足利市場においても桐生買廻商の勢力が大きかつた³⁾)。絹市は桐生足利ともに六齋の市と稱し、月六回開かれ、買廻商はこゝに於て機業者より織物を現金又は掛にて買取りたる後、之を江戸、京都その他に賣込む。技術的には元文年間に西陣の織工を迎へて縮緬、紗綾織等の技法を移入し、高機が導入されてより、頓に面目を改め、これにより販路もまた著しく擴大した御召縮緬の如きは桐生の創製にかかると傳へる⁴⁾。かくて西陣についてこの兩地は織物産地として重きをな

1) 本章及次章の記述は主として桐生織物史、足利市史、足利織物沿革誌(荒川宗四郎)による。 2) 桐生織物史、上巻、112頁。 3) 同書、上巻、95頁。
4) 足利市史、下巻、1018頁。桐生織物史、上巻、446頁。中巻、366頁。
5) 桐生織物史、上巻、112、121頁以下。

すに至つた。

當時の生産組織は概ね問屋制工業の形態をとれるものの如くである。一方に農家の副業として營まるるほか、專業化せる生産者も成立し、なかに漸次に資力を増大し、獨立生産者として相當の規模に達したものである。他方に零細なる賃機が多數に存在してゐたことは言ふ迄もない。桐生織物業（カ）によれば、元文以前、平絹白生地を製織してゐた時代には流通過程には買繼商（及び國賣、仲買）は成立してゐたが、生産工程の分化はなほ起らず、徳川中期以後、殊にその末期において製織技術も一層進歩し販路が擴大したため、生産工程及び經營の分化が現はれた。即ち機屋の有力なるものは獨立機業家として原料絲商にもまた買繼商にもさして支配されざる元機屋となり、彼は製品を市場において（例外として買繼商の店頭にて）買繼商に販賣する。之と併んで專業又は副業として營まるる多數の賃機が存在し、これらは元機屋（若くは買繼商、買繼商を兼ねる絲商）より絲の支給をうけ、また屢々織機をも借受けて賃織をなしてゐた。たゞ原料を元機屋より掛買し即ち借受けると共に、製品の販賣を託する代金仕事（の）の機屋、即ち下機屋が當時既に存してゐたか否かは疑問とされてゐる。

要するに元機屋は生産者たると同時に、問屋の機能を果して產地製造問屋たるの地位を占め、多數の賃機に對して生産を指導してゐたわけである。然し元機屋よりもむしろ絲商及び買繼商がかかる問屋的機能を果してゐたことは言ふまでもない。未だ江戸、京都等の問屋と買繼商との連絡が緊密でなく、前者よりの註文が一般化しない間は、買繼商は自己の思惑により零細なる機屋より買集めんがため或る程度まで彼等に對する原料絲の支給乃至前貸を行つたものと思はれる。⁶⁾然し註文生産が増し、また問屋よりの委託買付が行はれるに至つても、その充實せる資力を以て同様な活躍をした。かくて桐生及び足利の買繼商はこの當時は問屋の機能を擔當しつゝ、絹

6) 同書、270頁。横井時冬、日本工業史(改造文庫版)、122頁。

7) 同書、上卷、354頁。8) 同書、上卷、356頁。

9) 大島五郎、徳川時代桐生織物業の史的研究(土屋喬雄編著、日本資本主義史論集所載)、361頁。足利織物業沿革誌、93頁。

市場において生産者より買取りたる後、之を江戸、京阪の間屋に賣捌いた。商業者としてはこのほかに仲買若くは才取、即ちブローカーがあり、また集散地市場を経由せず地方需要者へ販賣する國賣も少數ながら存してゐた。¹⁰⁾なほ分化せる各業者には概ね仲間が成立してゐたが、冥加金を納めざる私的のものに止まつた。經營の規模は漸次増大し、徳川末期には既にマヌファクチュアの段階に達せるものがあつたとも見られるが、なほ疑問の餘地を残してゐる。¹¹⁾

三 明治年間における生産流通組織

明治以後における兩地の織物業が一段と發展を遂げたのは、技術的にはまづ西陣へ輸入された洋式染織技術が明治二十年前後にここに傳へられたこと¹⁾、我が國民經濟の發展に伴ふ織物需要の増大及び輸出の伸張に負ふたゞ桐生の如きは常に品質において西陣に次ぎ、かつ足利と共に多種多様な製品を織出し、又明治年間輸出絹織物の大半を占めた輸出羽二重において先鞭をつけた²⁾にも拘らず、屢々粗製濫造の弊に陥つて、信用を失墜したのみならず、機械化その他經營の改善においては著しきもなく、殊に明治後半は一般に停滯的であつたといへよう。

洋式染織技術としては、明治十年ジャカード機の移入を初めとし、これとドビ機による紋織、紋彫機、撚絲機による準備工程、洋式の染色整理法などがあり、これらはたしかに織物技術を進歩せしめたものであるけれども力織機の一般的使用は遙かにおくれた。力織機を最初に使用せる日本織物會社は明治二十年に創立された³⁾。これに先立つて純然たるマヌファクチュア形態による大規模化が見られる(明治十三年創立の成愛社及び十五年開業の縮

10) 桐生織物史、上巻、296頁。然し乍ら集散地間屋よりの註文取引が漸増する。

(大島五郎、前掲論文、358頁)。

11) 大島、前掲論文、297頁。土屋喬雄、日本資本主義史論集、149頁。

1) 桐生織物史、中巻、370頁以下。足利織物沿革誌、107頁以下、283頁。

絹織業會社⁴⁾が、日本織物會社は桐生足利の有力買辦商及び機業家と、東京の問屋等を發起人として創立せられ、特に桐生に支配的地位をもつ買辦商佐羽吉右衛門、同喜六氏を中心として、動力機械、準備整理工程用機械のみならず、力織機をも使用して綿繻子、綿壁織等を生産し、内需とならんで輸出をも振興せんとした。同年京都織物會社の創設におくること約半歳にしてこの地にもかかる新式經營法が企圖されたことは、當時の織物業に於て桐生のもつ地位と人材とを一應示すものと云へよう。然しながらかかる機械化する作業に職工の熟練なく、工場建設にも長年月を要し、また操業開始後不幸にも不況に遭遇したため、當初の成績は必ずしも良好でなかつた。剩さへ明治三十三年佐羽喜六氏の死去により打撃をうけ、三十五年桐生織物株式會社と改組された。この頃捻絲機及び整理精練用機械については農商務省より輸入機械の貸下などの奨勵があつたが、力織機は織物會社のほかには桐生織物學校に設置されたのみである。恐らく根本的には勞銀が低廉なるに反し、力織機が高價かつ不完全であつたことにより、また市場の狹隘(他面から見れば製品の多様性)によつて力織機の採用がおくれたのであらう。それが盛に導入されたのは明治の末年、殊には前世界大戰後のことである。足利における洋式技術の導入は明らかでないが、桐生と相前後してジャカード機が設備されたのを初めとして、稍おくれつつも大體同様の途を歩んだことと思はれる。桐生が高級かつ多様な絹織物に主力を注ぎたるに反して、足利においては明治二十年代より輸出綿織物が増加し、綿織物、絹綿交織物が相當の比率を占めてゐた。また桐生の輸出織物は相當の生産量を示して概ね三四割を占め、時には過半に達することもあつたに反し、足利においては輸出物の地位はより低かつた。(統計略)

かくして洋式技術の導入が行はれるとともに、之を端緒として各種の新奇織物が工夫され、また輸出織物にも

- 2) 桐生織物史、中巻、405頁。
桐生織物業に於ける前貸制度(經濟學論集、第1卷8號、第2卷2號)、第1卷、1140頁以下に生産過程の分化の詳細なる記述がある。
- 3) 同書、492頁。下巻、396頁以下。柳川昇、
同書、中巻、445、477頁。 5) 同書、下巻、240頁以下。

少からぬ努力が注がれた。この間に生産組織には如何なる變化が見られたか。準備工程及び整理工程の機械化は進行したけれども、力織機の使用は極めて少く、従つて前後工程の分化が更に確然としたほか、生産組織には一般に大なる變化はなかつたと見るべきである。たゞ第一に、輸出織物の發達は殊に品質上の要求から整理工程の機械化を進めたのみならず、その買織商を内地物買織商と分化せしめ、その地位を高めつつあつた。この傾向は第一次大戰後に特に明瞭となる。

註 注意すべきは屢々新奇織物を出したにも拘らず、それが新興機業地に模倣されることが多かつた。例へば羽二重は福井、石川、福島(川俣)に、富士絹は岐阜、富山、石川、福井に、紋縞子は福井に、(後の人絹織物は福井、石川に)模倣され、桐生はむしろ競争に敗れ没落された。その原因は新興産地が製品品の品質價格を落すばかりでなく、生産上の有利なる條件をもつて、この地は保守的な經營組織を維持したことにあつたと思はれる。またかかる競争上の不利のため、なほ更桐生は新しき工夫によつて利潤を得るほかなかつたのである。

次に機業の漸次の發展は機業者の資力と經營規模を増大し、下機屋を成立せしめた⁶⁾。即ち明治年間の發展は決して飛躍的ではなかつたけれども、なほ織物業の成長は見られ、多數の賃機(農工兼營も少くない)の中から、資力を増すと共に單なる賃業者の域を脱して代金仕事をなす下機屋が成立して來た。原絲を元機屋(織元)より借入れ、織り上げたる製品に對して代金を受取る。かくて明治年間には元機屋、下機屋及び賃機屋の三つが明瞭に分化してゐる。有力なる生産者の地位は次第に強くなつたが、なほ大多數は買織商の資本力と市場活動に依存し、之を經由して集散地へ販賣される。たゞ輸出織物についてのみ上記の如く生産者の地位が向上して、直接販賣が現はれ¹⁰⁾、買織商が排除される傾向が見えて來た。

生産者と商業者との關係においては輸出織物の分野においてのみならず、更に買織商の地位の退化を物語る事

6) 横井時冬、日本工業史、182頁。足利市史、下巻、1029頁。

7) 桐生織物史、下巻、535頁。足利市史、下巻、1047頁。

8) 柳川昇、前掲論文、第22巻、251頁。桐生織物史、下巻、371頁。

9) 桐生織物史、下巻、460頁。

實が見出される。何れの地においても機屋が零細なる間は仲買が絲の供給と共に製品の販賣を擔當し、問屋的機能を營むが、機業者の資力大となるに及び（製品種類、或は販路に特別の困難なき限り）自ら原料絲の仕入と主要生産工程とを行ひ、仲買は單なる買繼商となる。絲商との分化も確然となり、金融的機能及び生産指導の機能は漸次失はれる筈である。桐生及び足利の買繼商は正にその例であり、明治二十九年破綻した最有力の佐羽商店とその他少數の者を除けば明治半ば以降は大體は生産者と集散地問屋との仲介をなすに止まつた。¹¹⁾ たしかにその商業的活動は機敏であり、大なる資本を利用して產地織物を消費地へ賣込むために大きな働きをして來たけれども、その生産者に對する指導力は徐々に弱化した。然し乍ら國民經濟の全體的規模の擴大と集約化に伴ひ、之に代つて生産的機能を營む商業者の必要は直ちになくなるものでない。いまや集散地問屋がこの機能に果すこととなり、その結果、買繼商はこの側からも壓迫されるに至る。即ち集散地問屋よりの註文による生産が多くなり、六齋の市における市場取引のほか、元機屋（織元）又は買繼商の店頭にて取引する準市取引が認められ、その廢止案が實行されなかつたことも、問屋の機屋に對する支配力が強くなつたことの證左であるし、また明治四十年、買繼口錢の引上を要求したる兩毛買繼商の主張が容れられず、更に大正三年には逆に集散地問屋の側から買繼口錢廢止が強行されるに至つたもの¹⁵⁾、後者の優位を示すものに外ならない。尤も買繼商は從來（明治二十六年以來）¹⁶⁾ 一分八厘乃至一分二厘の口錢を問屋より受けてゐた代りに、この時から賣込口錢として一分二厘五毛を織物生産者に負擔せしめることには成功した。かくて買繼商の支配力は弱化したといへ、機業者に對してはなほ力を揮ひ得たわけである。なほ生絲商もまた信用（六十日乃至九十日の手形）による原料供給を通じて機業者を支配する力をもつてはゐたが、¹⁷⁾ 彼等が機業者の生産の内容に干渉することは少かつたやうである。

10) 同書、465頁。柳川昇、前掲論文、270頁。

11) 柳川昇、前掲論文は原料商或は買繼商の絕對的な支配力を強調される。然し佐羽商店破綻後の產地買繼商の弱體化は注意されねばならぬ。

12) 大島五郎、前掲論文、358頁。13) 桐生織物史、下巻、466頁。

要するに生産者の地位の向上と買辦商の弱體化は明治時代にはまだ萌芽的狀態に止まつたといつてよい。

四 第一次大戰後における發展

第一次大戰より支那事變勃發までの時期は凡そ二期に分つことが出来る。大戰の及ぼしたる直接間接の影響が我が國民經濟全般に對して大きかつたことは言ふ迄もないが、輕工業においては大本末期、あるひは昭和初期から戰爭の影響とは別個の發展が見られるからである。輸出の伸展は事變に先立つ數年に特に著しい。

世界大戰後の最も顯著な變化は生産組織の側においては機械化であり、流通組織の側においては市場における問屋及び百貨店の勢力増大であつて、これらは要するに我が國民經濟の飛躍的發展の結果にほかならぬ。

大戰中及び戰後において機業者の手中に著積された莫大な利潤¹⁾は、直ちに經營規模の擴大に向つた。少からぬ部分が消費の膨脹に充てられたことも事實であるが、機業者が利潤を直ちに織機増設に向けるのは各地とも共通の事例である。わが綿織物においては既に日露戰爭後に力織機が相當に普及するに至つたから、絹の力織機も漸次改良を加へられ、明治末年より徐々に使用されつゝあつた。また桐生にもその製作に當る桐生製作所²⁾が創立されて、明治四十年より事業を開始し、のち大戰中には桐生機械株式會社に繼承された。しかもここに直接かつ根本的な發展の動因が現れた。即ち國內及び海外市場の擴大である。戰時及び戰後における我國民の生活程度の上昇は絹織物消費を著しく高めたのみならず、移輸出(朝鮮、滿洲、米國、印度等)の増加は經營規模の増大に對する極めて有力な刺激であつた。殊に移輸出織物は取引單位大なるのみならず、内地織物の如き流行の變遷は少い。明治年間に支配的であつた羽二重のほか、富士絹及びスパングル³⁾等が現れたが、大量均一なる製品が要求

14) 同書、301頁。
16) 同年以前は更に高率であつた(同書、304頁)。
17) 桐生織物史、下巻、455頁。
1) 柳川昇、前掲論文、256頁等參照。
2) 桐生織物史、下巻、397頁以下。
3) 同書、405頁。

群馬縣力織機臺數の増加

年 末	職工十人以上のもの			十人未満のもの		
	戸 数	力織機	手織機	戸 数	力織機	手織機
大正 3	82	1,010	820	13,321	25	13,131
4	85	747	689	14,229	8	17,648
5	50	1,144	367	13,072	2	14,399
6	80	1,613	499	14,063	27	15,478
7	102	2,003	599	14,998	23	16,441
8	121	3,047	413	15,689	112	17,258
9	126	3,619	519	16,029	153	17,497

(群馬縣統計書による)

された。かくて力織機の使用はまづ大經營、ことに廣幅織機において見られ、やがて内地向織物及び賃機—小幅織機に普及するに至つた。大經營の株式會社形態をとるものが續々成立したのと歩調をとにし、やがて小經營にも利潤の蓄積が進行した結果であらう。手機は群馬縣においては、大正九年頃を絶頂として爾來減少に轉じ、足踏機は昭和初年より減少し始め、その殘存せるは漸く農業者の兼營賃機に限られることとなつた。

かくの如き力織機化は生産者の資力の増大を物語る限り、生産者の地位はそれだけ高まりつつあつたものといへる。尤も生産者の中には種々の分化が行はれ、一方に有力機業者が會社形態又は個人形態をとつて成長し、他方には輸出向生産者と内地向生産者とが分化した。殊に規模の増大は輸出向機業者に著しく、彼等はその地位を高めて、買繼を通じて直接に横濱の輸出業者と取引する。逆に有力なる買繼商にして會社企業を興し、又は資本的に經營的に之に参加する事により生産者化する場合も見られた。何れにせよ輸出織物については機械化と併行して生産者—製造問屋の地位が著しく高まり、買繼商は漸次排除される傾向が強くなつた。この點は桐生足利に共通であるが、輸出物多き桐生において一層顯著のやうである。内地織物については大規模經營の出現

- 4) 大正10年以降群馬縣全體としては廣幅力織機より小幅力織機の方が遙かに多い。昭和7年以降は再び逆轉して廣幅力織機が多くなる(群馬縣統計書による)。
 5) 柳川昇、前掲論文、所載、桐生織物同業組合の統計による(259頁)。
 6) 柳川昇、前掲論文、279頁。但し柳川氏の如く、この傾向が内地織物生産者及

も限度があり、買繼商排除も形式的には進行しない。要するに輸出物と内地物と相異なる兩部面が存したことは看過すべからざる事實であつた。

生産組織における變化は力織機の普及であるが、流通組織における變化は買繼商の後退と集散地問屋及び百貨店の進出である。月六齋の市(桐生―三八の日、足利―五十の日)を大正九年より七曜制と改め、桐生は本市日を火曜日、準市日を土曜日と定め、足利は夫々木曜日と月曜日と定め、取引決済をすべて本市日に行ふこととなつたのは、單に銀行その他の休日が日曜日たるに歩調を合せたに止まるが、大正三年には買繼口銭が廢止されたこと、並びに市場取引が減少せる結果、遂に昭和五年六月には市場廢止を見るに至つたことは、すべて内地向織物における集散地問屋の地位の強大化を示す事實である。蓋し市場取引(例へば桐生織物市場株式會社の上下市場における取引)が減少したのは、漸次集散地問屋よりの註文生産が増した結果であり、市場外取引、即ち買繼商あるひは元機屋の店頭における取引が益々多くなつたのである。根本的には國民經濟の一體化が愈々進むにつれて廣汎なる需要を對象とする商業活動のもつ意義が重大となり、之を擔當する問屋の資力と生産的機能がその地位を強大化したものと見ることが出来る。たゞかかる問屋の支配は決して目的意識的に順調に歩みを續けたわけでない。問屋として喜んで危険を負擔するものではないが、大戦中又は戦争直後の如く需要の増加した場合には、買漁り競争が激化する筈であり、問屋は買繼を通じて、或は通ぜずして機屋を捉へ、資金的援助又は販路の保證等の手段を以て商品を保せんとする。――買繼商が思惑的に買漁ることはこの地では比較的多くなかつた。自然、これと併行して生産に對する問屋の干涉指導の如きも行はれることとなる。初め買繼商の店頭にて行はれた註文取引が、やがて買繼商を伴つて機屋に至り、主として茲で行はれるに至つたのである。

び買繼商にも一般化せるものとするのは疑問である。

7) 桐生織物史、中巻、532頁。

8) 同書、中巻、520頁。下巻、466頁。

9) 例へば大阪織物同業組合三十年誌(474―77頁)、百貨店の實相(百貨店事業研

勿論、かゝる問屋の攻勢に對して買繼商は種々の手段を以て對抗せんとした。買繼口錢廢止問題については敗れたが、買繼商相互間の競争を防ぐために業者數の増加を制限した。桐生、足利ともに内地織物買繼商はながく二十六七名を超えない。また商業組合の組織に先立ち一種の統制組織をつくり、店員の訓練のほか、問屋よりの苦情を團體的に處理せんとし、更に組合結成後も取引は理事長名義を以て決濟した。兩毛織物の販路開拓のため東京、大阪その他において盛に開かれた宣傳會、陳列會の如きも、表面上は集散地問屋（並びに百貨店）と産地買繼商との共同主催とされてゐるが、そのイニシアティブはむしろ前者の側に強かつたのではないかと思はれる。

我が國に於て百貨店が飛躍的な膨脹を遂げたのは同じく第一次大戰直後であり、既に株式會社形態をとつてゐた三越、松坂屋のほか、松屋、白木屋、高島屋、大丸、十合等が株式會社となつたのは大正八、九年であり、又續いて地方都市にも百貨店の發達が見られた。¹⁰⁾百貨店の發達は大量の販路を開拓した點に於て、またこの需要層を背景として各店独自の高級品を生産せしめんがため生産地を指導した點に於て、織物その他雜貨生産に與へた刺激は決して少くない。尤もここで百貨店にイニシアティブのあつた場合と然らざる場合とがあつたことを見逃してはならない。昭和五、六年以前、競争の激化する以前の百貨店ノ殊に大都市の百貨店は各自安定な顧客を有し、高級品に相當の力を注いだ。このために流行品の如き、独自の考案による意匠を誇り、屢々新規の染織品を創出して、專屬の機屋をして織らしめた。（例へば三越が最近まで桐生に出張所をもつてゐた如きは、全くこれがために外ならぬ。）兩毛地方における織物意匠の進歩については問屋と併んで百貨店の指導力を逸することが出来ないが、かかる生産部面への進出は直接に行はれるとは限らぬ。從來吳服商その他が會社形態の百貨店に改組される時、又は電鐵會社等が百貨店の兼營を開始する時に、既に有力問屋の援助、即ち出資、委託販賣等なくしては殆ど不

究會、41頁）などにより之を窺ふことを得る。

10) 松田慎三、新訂デパートメントストア、138—9頁。ダイヤモンド社編、經濟記事の基礎知識（第6改版）、1325頁。

11) 三彩會（三越）、百選會（高島屋）、研彩會（大丸）、流行會（松坂屋）の如きはこ

可能であつて、事實上、三越、松坂屋を除けば問屋資本の参加を見ない百貨店は殆どない。直接問屋が出資するほか、商品産地の商人生産者にこれら株式を紹介勧誘したことも稀ではないといふ。かくして發展した百貨店が大衆需要層を開拓した功績は大きい。が廻つて問屋自身が自己の特徴開接には賣先の百貨店の特徴を創るため生産者を指導し、同時にこの大量なる販路を確保せんとして産地生産者と大規模小賣商とを結びつけた事も少くないのである。その後百貨店が直接生産者と接觸する傾向が漸次減退し従つて益々問屋を利用するに至つたのは、一には問屋を介在せしめる方が商品ストツクをかかへる必要と危険を減じ、また百貨店が一般に高級品より大衆品を主とするに至り、商品の特徴をさほど重視しなくなつたからである。とはいへ、勿論生産地に對する意匠の指導については問屋と協力を續け、かくして百貨店が益々危険を負担せざる指導者となるに至つたのは、根本的には百貨店の資本力と地位が強大となつたことに歸せられねばならない。

以上要するに、前大戰後においては力織機の普及による生産者の成長と、他方に問屋及び百貨店の勢力増大、産地買辦商の弱體化を明らかにすることが出来る。生産的機能は愈々集散地問屋の手に移り、生産の方向を動かすのは多くの場合彼等であつた。輸出織物にあつては生産的機能と商業的機能との結合を注意する必要がある。生産品種については桐生において帶のほか御召が主要なる地位を占めつゝあつたが、足利にては絹綿交織物及び綿織物が依然として大部分を占めてゐた(統計略)¹³⁾。

五 昭和年間に於ける問屋の活動

大正末年に至り前大戰後の恐慌による國民經濟の疲弊も回復し、昭和初年より絹織物の内地消費が増加すると

のための陳列會であつた。

12) 松田慎三、前掲書、160、288頁。

13) 群馬縣統計書によれば大正2年二百萬圓に達し、昭和元年既に三百萬圓を超ゆる御召の生産がある。桐生織物史、下巻、394頁。足利の生産高は足利市史參照。

足利規模別機業場数（地域別）（昭和11年末）

機臺数	輸出向	内地向	兼營	合計	總計
Ⅰ 市 内					
1—9臺	7	109	—	116	
10—19	14	157	3	174	
20—29	2	23	4	29	
30—39	1	9	—	10	
40—49	2	3	2	7	
50—99	3	2	3	8	
100—199	—	—	1	1	
200—299	—	—	—	—	
300—	—	—	—	—	
合 計	29	303	13	345	
Ⅱ 市 外					
1—9	41	232	24	347	463
10—19	31	236	18	335	509
20—29	17	51	9	77	106
30—39	7	17	2	26	36
40—49	1	8	1	10	17
50—99	4	5	1	10	18
100—199	—	—	2	2	3
200—299	—	—	—	—	—
300—	1	2	—	3	3
合 計	102	651	57	810	1,155

足利力織機臺数の増加

年 末	小 巾	廣 巾	合 計
昭和 3	4,523	1,523	6,056
4	6,040	1,848	7,888
5	6,240	2,180	8,420
6	7,350	2,389	9,739
7	7,363	2,733	10,096
8	7,159	3,362	10,521
9	7,297	3,859	11,156
10	9,004	4,723	13,727
11	10,836	5,568	16,404
*12	10,847	5,557	16,404

中小工業と問屋の機能

第五十七卷

三六〇

第四號

七三

* 昭和12年6月末現在
（足利織物同業組合調べ）

共に、他方では輸出、殊に朝鮮、關東州、滿洲向移輸出が著しく増加して來た¹⁾。この頃より多くの産業、特にここに問題とする織物業に相當顯著な發展を見出すのは、第一にかかる内外市場の擴大に負ふものであらう。昭和五年の金輸出解禁と世界的不況とが大打撃とはなつたが、やがて輸出の伸張期を迎へたことは世人の記憶に新たなところである。

試みにこの時期の生産規模の擴大を足利の織機臺数について見れば上表の如く、昭和三年より支那事變まで絶えず増加し、殊にその増加の勢は小幅織機よりも廣幅織機に大なることを知る。昭和十年には廣幅織機は織機總臺数の三分の一に達することとなつた。織機臺数別工場数を見れば

1) 日本貿易精覽（東洋經濟新報編）、620頁、378頁等参照。

ば、今なほ二十臺未満の零細規模のものが八割強を占め、一戸當り平均十四・二臺（昭和十一年²⁾）であつて、この意味で他の生産地に比して生産規模は大きくない。けれども他方において、百臺以上を設備せるもの六工場、五十臺以上百臺未満のもの十八工場を算するに至つてゐる。こゝで一般に輸已向織物を生産せる工場、若くは内地向織物を兼營せるものがより、大規模であること、並びに市内に比べて市外工場（主として足利市西部）に大規模なものが多いことが明かに看取される。生産品内容において、市内にては内地向絹織物（銘仙その他）が多いに反し、市外にては輸出絹織物、人絹織物（製品としてはスパンクレープ及び人絹縮緬）が多いからに外ならぬ。なほ桐生においても事情は大體同様である。

輸移出の發展に伴ふかくの如き生産規模の増大、殊に輸出物生産者の成長と、買繼商排除（若しくは兼營）の傾向は一層進行した。然し曩に述べたる如く、この傾向は直ちに内地物の生産流通機構にまで大なる影響を與へたのではない。この方面においても市況好轉したるため生産者の蓄積は増加し、力織機の普及が進んだ。昭和六年の工業組合法による幾つかの工業組合は昭和三年設立された桐生物産信用販賣組合と相俟つて、更に生産者の地位の強化を助けた³⁾。けれどもなほ内地向織物の生産者の規模は此地の生産品種（先染物）から來る制約のため或る程度以上には擴大しなかつた。特にこゝで注意すべきは、桐生足利地方には零細なる賃機多く、しかも今なほ農工兼營の賃機存し⁴⁾、生産者は自己の設備のみでなく、彼等を巧みに利用したことである。意匠の多様な品種を自由に選び、時には危険を他に轉嫁するには、かかる賃機を利用することが極めて有利であつたからである。これを利用する生産者は、生産の計畫を樹て準備工程（下拵）を自ら行ひ、或は他の専門業者に行はしめたるのち、製織工程の一部を賃機に委ねるが、中には大部分又は全部を賃織せしめるものがある。後の場合には彼等は織機

2) 足踏機を除く。
3) 工業組合が主として輸出業者について組織され、内地織物には後れたことは、
工業組合が主として輸出業者について組織され、内地織物には後れたことは、
両者の規模一生産者の地位一差異にも因るものであらう。
4) 織機供給調整協議會登録によれば、足利の織機 23,443臺のうち、農家兼營の

また準備工程用の機械をも）自ら設備する必要がない。彼等にとつて最も必要なのは市況の見透しと意匠の考案であり（尤もそれも事實上問屋の指示に従ふことが少なくない）、生産の具體的進行についての管理はいはゞ二次的機能ともなつてゐる。⁵⁾生産者とはいひながら——足利内地織物工業組合員の少からぬ部分にかかる「生産者」によつて占められ、逆に單純なる賃業者は組合員でない——實は問屋的色彩の極めて強いものである。足利にかくの如き設備をもたず、特に商業者の色彩強き機業者多きに對して、桐生の機業者は賃機のみに依存するものは少く、多くは自機をも有し、従つて生産者たる性格が明瞭である。

勿論、中小工業においてかかる市場の見透しと生産計畫の樹立が屢々問屋その他の商業者によつて擔當されてゐる事實——そこに問屋制工業が組織される——からすればこそ、自機を持たざる足利の機業者が商業者的と見られるが、他方それが生産的活動の重要な部分であるとすれば、彼等を生産者と稱することも強ち不合理でないこととなる。要するに、足利桐生における機業者の一部は、事實上商業者に近いものであり、賃機を極度に利用する生産者であつて、獨立生産者としての資力と設備とを十分具へてゐるとは言ひ難かつた。

生産者が以上の如く比較的零細なるときは十分なる意味での市場生産を行ふことは容易でない。問屋の指導干渉はこの時期において益々明白となつて來た。輸出織物においては輸出商が専ら之を擔當し、生産者の規模が比較的大なるため直接の注文生産のみが行はれ、生産者が同時に産地問屋的活動を営む。之に反し、内地物においては買繼商が前記の如く危険を負擔せざる單なる仲介業者に止まるが故に、かかる機能は集散地問屋によつて果され、彼等は若干の機屋を捉へて指導を加へる。立入つた指導を與へられたる生産者は原則として製品の販路を保證され、殆ど注文生産と異らぬ。即ち組織、圖案について指導を與へられるのみならず、生産數量、設備の改

5) 賃機は約 6,200 である。これは主として足踏機である。足利にはたゞみ屋又は整理屋(本來の染色整理業者でない)と稱し、單に生産者の委託をうけて買繼商に賣込む業者がある。その資本はかなり大きいものである。

善までも指令され、そのためには資金的援助を受けるに至るならば、當然その製品販賣は當該問屋によつて擔當される。蓋しこれによつて問屋は自己の特徴ある製品を得、しかも他に模倣せられざるやう、この機屋を確保せんとするからである。但し指導の必要と効果とは製品の種類によつて一様ではない。高級織物として御召が桐生の特徴となるに至つたのは集散地問屋の努力に負ふところが多いといはれる。有力機屋の中には百貨店或は有力問屋の專屬工場となるものがある。かくの如き密接なる關係に至らずとも、集散地問屋の生産者に對する指導は相當廣汎に行はれた。見込生産品を市日に市場へ持出して賣るよりも、問屋が買繼商の店頭にて機屋と取引することが、進んでは買繼商を伴つて機屋まで進出して取引することが漸次多くなり、遂には前述の如く昭和五年に市場取引が廢止されるに至つたことは、この間の事情を最も明らかに物語る。機屋において取引する場合には、屢々先物約定が結ばれ、それだけ集散地問屋と機屋との關聯は密接となる可能性が多く、たとひ明白なる約定でなくとも、機屋は問屋の希望又は示唆に基き生産の方向を調節するであらう。殊に商品拂底のときには問屋より註文を與へることが多くなる。尤もかくいへばとて、兩毛地方における内地織物生産が大部分註文生産になつたといふのではない。市場の好轉が見込まれ、問屋の商品蒐集が激しくなるときは先物約定が多くなるが、市況不安のときは問屋はかかる危険を冒さない。たゞ生産者の生産計畫あるひは生産方向の決定に對して集散地問屋の有形無形の指導が大きく働いたことだけは疑ひ難いと思はれる。

專屬機屋（或は逃機）即ち完全なる註文生産の機屋と、見込生産の機屋（特に大衆品に織るものを並機屋といふ）との割合は、兩毛地方においても土地によつて異なる。伊勢崎は最も意匠を凝らして高級銘仙を特徴とし、かつ手機足踏機によるものが著しく多い。それ故生産數量は少いが、優秀なる技術をもつ機屋は多く問屋の專屬となつて、

兩者の關係は最も密接である。足利は後述の如く新奇の意匠を考案するが、専ら大衆品を主眼として目先を變へる事に努力するが故に、定常的な取引關係に入り難い。桐生はこの中間に位し、御召と帶において技術を要し、特に御召において問屋の指導が相當に加へられた。桐生において問屋と特約せる機屋は統制前に全體の約四割程度であつた。

問屋の指導の明白なる事實はこの時期における生産品種の轉換、乃至は或る生産品種の發展にすることが出来る。桐生における高級織物は西陣の技法を學んだものであるが、後者の域に達することは固より容易なことではなかつた。帶において御召において、桐生の技術は明治末あるひは大正年間より漸次進歩を示しつゝあつたが、なほ若干の逕庭あることは否み得なかつた。たと帶において西陣が技術を生命としたが爲め機械化におくれたに反し、桐生はより、早く力織機化し、しかも昭和初年よりわが人絹絲生産の興ると共に之を利用して逸はやく人絹帶地に進出することにより、これが大衆化に成功した。御召においても亦西陣の壘に迫ること困難なるがため、それより稍格安品を狙つた。――暫くは西陣産の名を以て賣られ桐生御召の名聲を得ることが容易でなかつた。――ではあるが、それでも今日程度の技術に達する迄には問屋の少からぬ指導が必要であつた。またその結果として問屋と機屋との關係はこの場合極めて密接となつてゐる。早きものは前大戰直後より御召の指導を始めてゐたが、大體大正末年より一般的となつた。かくしてこの頃において帶と御召が桐生の主要製品となつたについては集散地問屋の指導が相當な貢獻をしてゐる。勿論兩者の關係には好ましからぬ半面が伴つたことも事實である。例へば先物契定によつて商品販賣を引受ける代りにその價格を切下げる。約定と同時に幾分かの資金融通を與へてゐる場合には一層この可能性が大きい。また問屋の中には市況悪化の際には約定を破棄し、或は商品の瑕疵を

理由として大なる値引を要求する者もあつた。けれども他の半面において技術上、經營上の指導干渉が加へられたことは桐生機業者にとつて少からぬ利益であつたと言ふことが出來よう。

足利においては事情がやゝ異なる。足利の生産品種は大正末年まで絹織交織及び綿織物が多かつたのであるが、國民大衆の消費嗜好が漸次綿を去り細き纖維類に移つたに應じて、この頃より漸次に絹及び人絹銘仙に轉換を始めた。もと足利の銘仙は伊勢崎銘仙を模したものであり、伊勢崎が手機による緋の複雑なる柄を特徴とせるに對し、之をより大衆的商品とするため力織機の使用、絹紡絲の使用その他種々なる工夫を凝らした。足利の特徴は高度の技術をそのまま取入れた點にあるのではなく、之を廉價に供給し、かつ新奇なる柄模様を以て、特に加工の工夫によつて人目をひかんとするところにあつた。この頃の製品は主として絹銘仙であつたが、屢々粗惡なる原料を用ひ絲量を減ずる如きも生産費切下げのために採られた手段であり、これがため一時足利銘仙の聲價は地に墜ちたのであつた。けれどもまたこの中から新らしき意匠によつて最も成功するに至つたのは解銘仙ほだしであつて、昭和四、五年頃よりは足利生産品の首位を占め之を代表するものとなつた。解銘仙も伊勢崎銘仙の一種の大衆化であつたから、最初のうちは足利産とせず、伊勢崎を通じて賣つてゐた程であるが、模様銘仙とも稱し、模様の變化が極めて自由なるを利して斬新なる柄と大量生産的方法を以て市場を開拓した。大衆品を主とすることは、正絹銘仙に比して絹人絹交織の銘仙がその數倍に達することからも明らかである。特にその一種なる半併用、即ち緯絲に緋絲を用ひるものは製織能率が上らないから、農家兼營の足踏機を利用してゐるのも、甚だ巧みな方法であるといへよう。原料に絹紡絲又は人絹絲を用ひて生産費を低下すると同時に、かくの如く柄模様によつて商品に多様の變化を與へんとする足利の特徴は、生産者の機敏と技術的努力によるものと自らは誇る。解銘

仙を考案し、或は大量生産化したる人が何人なるや、今これを詳かにしないが、新奇なる工夫に長ぜるこの地の氣風はたしかに生産者をしてかかる創意の實現に努力せしめたであらう。然し背後からこの傾向を指導助長したものは何であつたか。足利銘仙の市場を開拓するとともに、意匠考案に或る程度の方向を與へたものは、産地買繼商よりも寧ろ集散地問屋であつたと稱して大過ないであらう。たゞ製品が大衆品であつて價格變動激しく、従つて定常的取引關係が亂れやすく、他方技術については問屋の立入つた指導を必要とすること比較的少きが故に、指導といつても桐生における御召の如く深きものは少かつたやうである。

六 總 括

以上によつて桐生及び足利を通じて見られる特徴は、輸出織物の發展と、内地織物において多様な意匠によつて絹織物に或る程度の大衆化を實現したことである。尤も輸出絹織物及び人絹織物については他の生産地、例へば福井、石川、愛知等の諸縣に比してその發展は劣る。内地織物に關しては人絹絲を巧みに利用し、また一方に御召の如き相當高級品の生産を行ふと共に、他方に帶、銘仙等を大衆商品化することにより發展を遂げた。しかもこの場合と雖もその商品の大量化には狭い限界があつたが故に、生産者の規模の増大と地位の向上とはなほ顯著ではなく、或る程度まで産地買繼商の支配は脱し得ても、集散地問屋の指導とひいてはその支配の下に零細經營の色彩を持續して來た。

前大戰後における問屋口錢の廢止において、また昭和年間における市場取引の廢止において、更に生産品種の轉換において見られる産地問屋又は買繼商の弱體化、之に代る集散地問屋の生産者支配なる事實は、程度の差を

をあれ、各織物産地に共通なる一般的傾向と言へる。これは主として生産者の地位向上と、集散地問屋の市況判斷及び大量商品消化の能力と、資本力強化に因るものであらう。かくして市場生産の十分なる判斷能力に乏しい中小工業者——この意味で半生産者ともいへよう——に對して生産方向の決定を行ひ、彼等を動かしてゆく機能は、産地問屋から愈々集散地問屋の手へ移つた。中小工業における最も「企業者」的な機能は實は問屋の果すところであつた。蓋し直接に問屋が指導する機屋は何割かに過ぎないとしても、多くのものは之に追隨するからである。たと兩毛機業地において買繼商が單なる仲介業者に止まり、問屋的機能を果すに至らなかつた（輸出織物を除く）のは何故か、恐らく根本的原因はこの地が先染物を主とせる事にあらう。先染物にあつては織上り及び整理と共にその時の流行或は一般に市場の狀況からして、商品の價值殆ど決まり、後染物（白生地）の如く加工の方法と時期とによつて對應することが困難である。市場の組織もまたひいて異なる。價格は後染物の如く後から増加する部分が少い。かくて生産者及び買繼商が變動から受ける危険は大きく、買繼商が自由なる市場活動を行ひ得ない所以である。精々集散地問屋の大なる資本力によるほかは之に堪へることが出来ない。然し、この點については尙立入つた比較研究を必要とするであらう。

次に來る統制の初期においてかかる傾向を更に強めた問屋も、今や配給機構の整備に伴ひ生産的機能を喪失するに至つたが、この間の事情は別の機會に譲る。然しこの機構に對する批判について本稿は何等かの示唆を與へないであらうか。